資料

感情エピソードの会話場面における
表出性ハロー効果の検討^{1,2}

大阪大学大学院人間科学研究科	木村 昌紀
同志社大学文学部	余語 真夫
大阪大学大学院人間科学研究科	大坊 郁夫

Expressivity halo effect in the conversation about emotional episodes

Masanori Kimura

Graduate School of Human Science, Osaka University, Yamadaoka, Suita 565-0871

Masao Yogo

Faculty of Letters, Doshisha University, Kamigyou-ku, Kyoto 602-8580

Ikuko Daibo

Graduate School of Human Science, Osaka University, Yamadaoka, Suita 565-0871

“Expressivity halo effect” (Bernieri, Gillis, Davis, & Grahe, 1996) refers to the phenomenon which observers’ rapport judgments are influenced by target expressivity regardless of the social context. This study examined expressivity halo effect in conversations about emotional episodes. In study 1, the validity of the expressivity halo effect on a Japanese sample was tested. Study 2 suggested that the scores of observers’ judgments of rapport between interactants were higher during conversations about positive emotional episodes in which expressions were facilitated, than for conversations about negative emotional episodes in which expressions were inhibited. In study 3, expressivity halo effect was thought to increase the gaps between interactants and observers’ judgments. The accuracy of the observers’ judgments was poorer for conversations about negative emotional episodes than for conversations about positive emotional episodes.

問 題

学校や職場、家庭、地域社会とさまざまな場面において、われわれは無数の人間関係に囲まれて日々の生活を送っている。そのため、周囲

の人間関係を把握することは、自らがその中で円滑な対人関係を形成し維持していく上で必要不可欠なものとなる。周囲の人間関係を把握するための豊富な情報源は日々の対人コミュニケー

- 1 本論文は、第一著者の同志社大学文学部卒業論文（平成13年度）および大阪大学大学院人間科学研究科修士論文（平成15年度）のデータに新たな分析と解釈を加えたものである。なお、本論文の研究1は、日本感情心理学会第10回大会において、研究2は、日本心理学会第67回大会において、研究3は、日本グループ・ダイナミクス学会第50回大会において報告された。
- 2 本研究実施に際し、一宮女子短期大学尾上恵子先生、立命館大学荒川歩先生にご協力いただきました。ここに謝意を表します。また本論文作成過程において、愛知淑徳大学小川一美先生、相愛大学金政祐司先生には貴重なアドバイスをいただきました。心より感謝申し上げます。

ションであろう。つまり、われわれはコミュニケーションを行なう会話者として存在すると同時に、観察者として周囲のコミュニケーションを認知し、その情報をもとにして周囲の人間関係を理解するのである。それでは、会話者と観察者は同じように対人コミュニケーションを認知しているのだろうか。

社会的認知の研究分野では、行為者と観察者は異なる視点をもつことから、同じ事態に対して異なる解釈を行うことが知られている (e. g., Jones & Nisbett, 1972)。Monahan (1995) は、会話相手への親和動機の違いや認知負荷の違いから、会話者と観察者では会話場面の情報処理様式が異なることを示唆している。また Duval & Wicklund (1972) は、会話場面における会話者と観察者の情報処理様式の違いを、両者の目標の相違から説明している。会話場面における会話者の目標は会話相手との相互作用を進めることであるが、観察者の目標は会話に関するあらゆる情報を収集することである。このように、自分自身が会話を行なう場合の認知と、観察者として会話を観察する場合の認知との間にはズレがあると考えられる。

Bernieri, Gillis, Davis, & Grahe (1996) では、欧米人大学生を対象にして、議論場面（社会的な問題について話し合う）と協力場面（世界旅行の計画を立てる）という2つの社会的な文脈において、話者自身がどのようにコミュニケーションを行い、その評価を行っているのかについて検討する一方で、観察者がどのような手がかりから対人コミュニケーションを認知するのかについて検討している。その結果、観察者が話者の会話に対する評価を推測する際に、表出行動の活発さの印象である「表出性」を手がかりにしていた一方で、話者自身の会話に対する評価は「表出性」にかかわらずに行われていた。Bernieri et al. (1996) は、話者の表出行動が活発であれば、そのコミュニケーションがうまくいっていると観察者が判断してしまうこの現象を「表出性ハロー (expressivity halo) 効果」と名づけた。

しかし、このBernieri et al. (1996) の指摘する「表出性ハロー効果」という現象を一般化するためには2つの問題点がある。1つは、「表出性ハロー効果」が文化を越えて成立するのかという問題である。高井 (1996) や Takai & Ota (1994) は、低コンテクストの文化である西欧に対して、高コンテクスト文化である日本では、対人コミュニケーションにおいて、送り手がしばしば沈黙や曖昧な表現を用いやすく、受け手は文脈や非言語行動に内在する細かい情報を巧みに読み取ることを指摘している。また中村 (1991) や Scherer, Wallbot, Matsumoto, & Kudoh (1989) による感情表出行動に関する比較文化研究では、欧米人に比べて日本人は表出行動が抑制されていることが明らかにされている。つまり、高コンテクスト文化では、会話者の表出性が低くてもコミュニケーションがうまくいっている可能性が高く、それゆえ観察者も表出性の低いコミュニケーションを見てうまくいっていると判断することが起こりうる。このことを考慮すると、高コンテクスト文化である日本人の場合、Bernieri et al. (1996) のいう「表出性ハロー効果」はあらわれにくいことが考えられる。このことから、高コンテクスト文化である日本において、「表出性ハロー効果」が認められるのかを検討する必要がある。

Bernieri et al. (1996) の研究のもう1つの問題点として、対人コミュニケーションにおける、話題の感情価について考慮されていないことが挙げられる。表出行動は話題の感情価によって異なることが指摘されている (e. g., Scherer & Ekman, 1984)。話題の感情価がポジティブな場合（ポジティブ感情エピソード；最近楽しかった出来事）とネガティブな場合（ネガティブ感情エピソード；最近悲しかったり不安だったりした出来事）とでは、話者の表出行動は大きく異なるだろう。話題の感情価によって表出行動が異なるのであれば、表出行動を手がかりに行われる対人コミュニケーションの認知も十分影響を受ける可能性がある。日本人は公的場面でポジティブ感情に比べて、ネガティブ感情

の表出を抑制することが知られている (Matsumoto & Ekman, 1989; 中村, 1991)。したがって、もしも「表出性ハロー効果」によって、表出性を手がかりにして対人コミュニケーションの認知がなされているのであれば、表出が抑制されて手がかりの少ないネガティブ感情エピソードでは、表出行動が促進されるポジティブ感情エピソードに比べて、観察者はそのコミュニケーションがうまくいっていないと判断してしまう可能性が大きい。しかしながら、話者の認知レベルではそのような判断は行われないと考えられる。その結果、ポジティブ感情エピソードに比べて、ネガティブ感情エピソードでは、「表出性ハロー効果」により、話者の会話に対する認知と、観察者の認知とのズレが大きくなることが予測される。つまり、ネガティブ感情エピソードでは、話者の認知と観察者の認知のズレが大きくなることから、対人コミュニケーションの認知が不正確になると予測される。

本研究では、まず研究1で、日本人大学生を対象にして、「表出性ハロー効果」を高コンテキスト文化に適用することの妥当性を検討する。次に、研究2と研究3では、話題の感情価を考慮に加えて検討を行う。研究2では、「表出性ハロー効果」が感情エピソードの会話場面において、観察者による対人コミュニケーションの認知にどのような影響を与えるのかを検討し、研究3では、より包括的に、「表出性ハロー効果」が対人コミュニケーション認知の精度に及ぼす影響を検討する。本研究によって、Bernieri et al. (1996) の「表出性ハロー効果」に関する理論は、文化的側面および感情的側面から精緻化され、より一般化可能性の高いものになると考えられる。

研究 1

研究1では、高コンテキスト文化である日本においても「表出性ハロー効果」が認められるのかどうかを調べるため、以下の仮説を検討した。まず、「表出性ハロー効果」によって、話者の表出行動の活発さを手がかりにして観察者が

会話を評価するというBernieri et al. (1996) の知見から、以下の仮説が導かれた。

仮説：話者は自身の表出性に関わらず、会話がかうまくいっているかどうかについて評価する一方で、観察者は「表出性ハロー効果」によって、話者の表出行動が活発なコミュニケーションをよりうまくいっていると判断するだろう。

次に、もしもこの仮説が支持され、表出性を手がかりにする「表出性ハロー効果」が日本人でも認められるのであれば、話題の感情価によって、観察者による対人コミュニケーションの認知の精度にも影響が生じる可能性がある。Bernieri et al. (1996) は対人コミュニケーション認知の精度を、話者の会話に対する評価と観察者による会話に対する評価の相関関係で定義している。本研究でも同様の方法で話者と観察者の会話に対する評価の関係を検討する。

方 法

実験参加者 実験参加者は、会話者、観察者、「表出性」の評定者で構成されていた。

会話者は、互いに未知の大学生60組120名（男性30組60名、女性30組60名）であった。男性の平均年齢は18.6歳 ($SD=0.7$)、女性の平均年齢は18.9歳 ($SD=1.2$) であった。

観察者は、男性36名（平均年齢21.9歳, $SD=1.9$)、女性36名（平均年齢20.1歳, $SD=1.1$) の計72名であった。

また、本研究の焦点である「表出性」に関する評定を行なうために、観察者とは独立した、男性36名（平均年齢20.8歳, $SD=1.5$)、女性36名（平均年齢20.1歳, $SD=0.6$) の計72名が参加した。実験参加者はすべて心理学に関連する授業で募集された。

会話手続き

話題条件 会話の話題にするエピソードの感情価を操作するために、話題条件にポジティブ、ネガティブ、ニュートラルの3通りを設けた。具体的には、ポジティブ条件では話者自身が喜びや幸福感を感じたエピソードを、ネガティブ

条件では不安や悲しみ、苦痛を感じたエピソードを想起して回答するよう話者に求めた（詳しくは後述の質問紙(2)を参照）。ニュートラル条件は、ポジティブ条件とネガティブ条件の条件操作をチェックするために設けた。

質問紙 本実験では会話参加者に以下の5つのカテゴリーの項目群を提示して回答するよう求めた。具体的には以下のとおりである。

(1) **会話相手との関係性の質問項目。** ①全く知らなかった、②顔を見たことはあった、③あいさつしたことがあった、④世間話をしたことがあった、⑤たびたび話をする機会があった、⑥頻繁に話をしている、⑦悩み事の相談をしたことがある、⑧その他、から2人の関係に該当する選択肢を1つ選択するように求めた。分析の対象とする標本には、両者の回答が一致し、かつ①か②に該当するペアを選んだ。

(2) **過去の感情エピソードに関する質問項目。**

会話参加者に感情エピソードを想起してもらい、簡単に記述するよう求めた。ポジティブ条件では、最近喜びや幸福感を感じたエピソードを想起するよう求め、その出来事の発生時期、出来事が発生した場所、その場面に居た人物、具体的な出来事の内容、その出来事によって喚起された気持ちについて記述するよう求めた。ネガティブ条件では、最近不安であったり、苦しかったり、悲しいと感じたエピソードを想起するよう求められる点がポジティブ条件と異なる。ニュートラル条件では、特定のポジティブ感情エピソードでもネガティブ感情エピソードでもない話題として、これから1週間の予定を述べるよう求めるため、各自の予定を自由記述するよう指示した。各条件の質問紙の記入時間として5分間を設

けた。

(3) **会話に対する評価に関する質問項目。**

Bernieri et al. (1996) の主観的ラポール感に関する18項目尺度の質問文を邦訳した。各項目に対して「まったくそうでない」を1点、「まったくそのとおりである」を8点とする尺度で評価するよう求めた³。

(4) **会話中の感情喚起状態と、話題の感情価に関する質問項目。** ポジティブ条件では、会話中に話者自身が実際に感じた喜び（幸福感）の強度、ならびに会話のエピソードを世間一般の人が体験した場合に感じると思われる喜び（幸福感）の強度についてそれぞれ8段階で評定を求めた。ネガティブ条件の質問の内容も同様に、それらの項目について、ネガティブ感情（悲しみや不安、苦痛）の強度について評定を求めた。ニュートラル条件の場合、条件操作の確認のために、ポジティブ条件で用いた2項目とネガティブ条件で用いた2項目の両方の質問に回答を求めた。

(5) **会話の盛り上がり時期について問う質問項目。** 後半の5分間においてもっとも会話がうまく進んでいたと感じたのは前期・中期・後期のいずれの時期であったか、あるいはそのように感じる特定の時期はなかったかという4つの選択肢の中から選択を求めた。この質問項目も条件操作の確認のため行われた。

装置 撮影装置として、デジタルビデオカメラレコーダー (SONY, DCR-TRV30) を用いた。

手続き 会話参加者は複数の心理学関連の講義クラスで募集し、指定した日時に、同性の見知らぬもの同士がペアになるように実験室に招集された。会話参加者が実験室に到着すると、指示があるまで待機するように求めた。会話参

3 具体的な項目内容は、「会話を上手く調整することができた」、「会話にうんざりしていた」、「協力的に会話が進んだ」、「会話が調和していた」、「不満足な会話であった」、「会話が調子よく進んだ」、「冷たい感じのする会話であった」、「会話はしにくいものであった」、「会話の焦点がぼやけていた」、「会話に夢中になった」、「相互に興味をもって会話ができた」、「会話は緊張感を伴うものであった」、「好意的に会話ができた」、「互いに積極的に会話が進んだ」、「互いに肯定的な態度で会話が進んだ」、「会話は退屈なものであった」、「会話は価値のあるものであった」、「ゆっくりと会話は進んでいた」、「の18項目だった。

加者が2人そろった時点で以下のように教示した。

「本日は実験に参加していただき、大変ありがとうございます。これから行う実験は、お2人で会話をしていただき、その会話のパターンを知ろうというものです。実験の所要時間はおよそ30分になります。」

次に、質問項目(1)(2)を実施した。先に記入した感情エピソードの内容について、2人で話し手と聞き手に役割分担して会話するよう求めた。役割分担を行なった意図は会話が途切れないようにするためであり、「話し手の提供した話題であれば自由に話してよい」と教示した。会話の際は、椅子に移動した。椅子は、カメラを向いてハの字型に内側向き45度に配置し、椅子間の距離は100cmとした。会話の様子は5m離れた位置からデジタルビデオカメラで会話参加者2人の全身が入るように撮影した。会話を撮影する際に、録画の操作を行うとすぐ教示者は退出し、実験室内には会話参加者2人のみとした。まず、5分間自己紹介を兼ねて自由に話すよう求めた。このセッションは、実験参加者がカメラに慣れてリラックスすることを目的として行った。次の5分間で、先に記入させた感情エピソードについて話すよう求めた。

終了後、座席に戻って、自身らの会話について質問項目(3)(4)(5)に回答するよう求めた。最後に、ディブリーフィングを行って、会話参加者にデータとしての使用許可を得た。

観察者による会話解読実験手続き 観察者に刺激として呈示したのは感情エピソードについての5分間の会話記録であった。解読実験ではさらに、観察者の集中力を考慮して5分間のうち最後の3分間を抜粋して呈示した。この操作に関する妥当性は、会話参加者が後半5分間のうち、中期から後期にかけて会話がうまく進んでいたと回答していたこと（会話参加者全体の85%）からも保証されているといえる。

60組の会話場面に対する観察者の解読実験は、観察者の負担を軽減するために、以下の手続きで実施された。60組の会話場面のうち、男性ペア30組60名分の会話場面は男性の観察者に評価

するよう求め、女性ペア30組60名分の会話場面は女性の観察者に評価するよう求めた。60組の会話場面は5組を1セットとする12セットに分けられ、各刺激セットに対して6名の観察者が評価課題を遂行した。言い換えると、1人の観察者は同性のペア5組の会話場面を評価したことになる。なお、各観察者に対する各組の会話場面の提示順序は入れ替えられた。

観察者が実験室に到着すると、着席するよう求め、音声を消去して刺激を呈示した後、質問紙に記入を求めた。刺激呈示のための装置として、モニターテレビ (MITSUBISHI, 21C-S50) とビデオデッキ (SHARP, VC-BS1000) を用いた。各刺激呈示後、観察者は質問（それぞれの話者について、「会話に対してどの程度満足感を感じていたか」）に8件法で回答した。

評定者による会話の印象評定手続き 評定者の印象評定手続きは、観察者の解読実験と同様の手続きで実施された。評定者に呈示した刺激及び装置も、観察者に対して行ったものと同様であった。各刺激呈示後、評定者は質問紙に8件法で回答した。研究1では、Bernieri et al. (1996) にならい、「表出性」を「会話中の行動の全般的な活発さを示す程度」と定義し、「会話中の行動 (e.g., 表情や動作、発言など) が活発であった」程度を個々の話者について評定するよう求めた。

結果と考察

まず、「表出性ハロー効果」の日本での妥当性について確認するため、仮説の検証を行った。

「関係性」の操作確認 「会話相手との関係性の質問項目」の結果に基づくと、本実験に参加した60組120名の大学生は、それぞれの会話相手に対して①「全く知らなかった」もしくは②「顔を見たことはあった」と回答していた。したがって、本実験では60組120名をすべて分析の対象にした。

「表出性」の操作確認 評定者によって評定された、会話中のコミュニケーション行動の全般的な活発さの印象である「表出性」について、平均値 ($M=4.44$, $SD=1.10$) を基準に会話者

集団を表出性の高い群 (66名) と低い群 (54名) に分けた。各群の「表出性」の平均値を算出し、検定を行った。表出性の高い群 ($M=5.25$, $SD=0.63$) は低い群 ($M=3.44$, $SD=.61$) よりも有意に表出性が高かった ($t(118)=15.81$, $p<.001$)。

「表出性ハロー効果」の実験的検証 会話が回答した、会話に対する評価についての18の質問項目の評定値に基づいて、 α 係数を算出したところ.92と高かったため、18項目を会話満足度尺度とみなし、平均値を算出した。

「表出性」高群 ($M=6.01$, $SD=1.03$)、低群 ($M=5.74$, $SD=1.18$) で会話参加者自身の会話満足度得点には有意差がなかった ($t(118)=1.32$, n. s.; Figure 1)。その一方で、観察者が判断した会話参加者の会話に対する満足度は表出性高群 ($M=5.01$, $SD=0.92$) が低群 ($M=4.39$, $SD=1.09$) よりも有意に高く評定されていた ($t(118)=3.37$, $p<.001$; Figure 2)。会話参加者自身は表出行動の活発さに関わらず会話に対する評価を行っていた一方で、観察者は会話参加者の表出行動が活発なほど会話に満足していると判断していたのである。これらの

Figure 1 話者自身の会話満足度

Figure 2 観察者の推測した会話満足度

結果は、仮説を支持しており、Bernieri et al.(1996)の結果と一致することから、日本人大学生においても「表出性ハロー効果」が確認されたと考えられる。高コンテクスト文化 (高井, 1996; Takai & Ota, 1994) にあり、表出を抑制する傾向のある日本 (中村, 1991; Scherer, Wallbot, Matsumoto, & Kudoh, 1989) においても、「表出性」に関する独自の基準が存在し、対人コミュニケーションを認知する際の手がかりとして用いられているといえるであろう。

次に、「表出性ハロー効果」によって、話題の感情価が対人コミュニケーションの認知に及ぼす影響について探索的に検討を行った。

話題の感情価に関する操作確認 会話参加者自身が判断した、1) 会話中の感情喚起状態と、2) 会話中の話題がもつ感情価の両指標について、ポジティブ条件 (1) $M=5.48$, $SD=1.50$; 2) $M=5.30$, $SD=1.98$) ではニュートラル条件 (1) $M=4.65$, $SD=1.55$; 2) $M=3.73$, $SD=1.59$) よりもポジティブ感情が有意に高く評定されていた (1) $t(78)=2.42$, $p<.01$; 2) $t(78)=3.93$, $p<.01$)。また、ネガティブ感情についても、ネガティブ条件 (1) $M=4.85$, $SD=1.96$; 2) $M=5.53$, $SD=1.85$) はニュートラル条件 (1) $M=2.03$, $SD=1.75$; 2) $M=2.23$, $SD=1.49$) よりも有意に高く評定されていた (1) $t(78)=6.82$, $p<.01$; 2) $t(78)=8.77$, $p<.01$)。したがって、本研究における話題の感情価の操作は成功したといえる。

話題の感情価が対人コミュニケーションの認知に及ぼす影響 各条件において、会話参加者と観察者の認知の関連性を検討するために、Bernieri et al. (1996) にならい、会話参加者自身による会話満足度得点と、観察者が推測した話者の会話満足度との性別を統制した偏相関係数を算出したところ、ポジティブ感情エピソードでは.38 ($p<.01$)、ネガティブ感情エピソードでは.01 (n. s.) であった。つまり、「表出性ハロー効果」によって、表出の抑制されたネガティブ感情エピソードよりも表出の高いポジティブ感情エピソードで会話参加者と観察者の認知の相関関係

が大きくなることが示された。この結果は、ポジティブ感情エピソードよりもネガティブ感情エピソードのほうが対人コミュニケーション認知の精度が低くなることを示唆していると考えられる。

研究 2

研究1では、日本人大学生においても「表出性ハロー効果」を確認した。さらに、ネガティブ感情エピソードよりもポジティブ感情エピソードで会話参加者と観察者の認知の相関関係が大きくなることも認められた。これは、「表出性ハロー効果」によって、表出が抑制されたネガティブ感情エピソードでは、表出行動が促進されるポジティブ感情エピソードに比べて(e. g., 中村, 1991)、観察者はそのコミュニケーションがうまくいっていないと判断した一方で、話者の認知レベルではそのような判断は行われなかったためと考えられる。研究2では、この点について検証することを目的とした。

加えて研究2では、手続き上の工夫をいくつか行った。1つは質問項目の対応についてである。研究1で、会話参加者に回答を求めたのはBernieri et al. (1996)の主観的ラポール感に関する質問項目18項目を和訳し文章形式にしたものであった一方で、観察者に回答を求めたのは話者の会話満足度1項目であった。この対応関係をより明確に捉えるために、研究2では、会話参加者が回答したものと同様の質問項目について観察者に問うこととした。

もう1つは、質問項目の対象についてである。研究1では個々の話者についての会話に対する評価を観察者に推測するように求めたのに対し、研究2では会話全体の雰囲気について観察者に判断を求めることで、「表出性ハロー効果」が個々の話者の会話に対する評価だけでなく、会話全体の雰囲気にも適用できることを確認する。

最後は、実験計画についてである。研究1では、刺激呈示の際にコミュニケーションの時間的推移を観察者にできるだけ不足なく把握してもらうために、1つの会話場面につき3分間分

の場面を呈示した。この手続きでは、1つの会話あたり比較的長く刺激呈示できる反面、1人の観察者が多くの刺激について評価できないという問題があった。しかしながら、1人の観察者が多くの刺激を評定し、被験者内要因の実験計画にすることで評定の個人差の統制が可能となる。そこで研究2では、1つの会話場面あたりの呈示時間を1分間に短縮して被験者内の要因計画で解読手続きを実施し、結果の堅固性を確認することを目的とした。

研究2の仮説は以下の通りである。

仮説：話者自身はポジティブ感情エピソードとネガティブ感情エピソードとでは会話に対する評価に差がない一方で、観察者はポジティブ感情エピソードよりもネガティブ感情エピソードの会話をうまくいっていないと判断するであろう。

方 法

実験参加者 学部生男女各10名の計20名（平均年齢20.3歳、 $SD=0.9$ ）が観察者として参加した。実験参加者はすべて心理学の授業にて募集を行った。

手続き 研究1で呈示した3分間の刺激のうち中間部の1分間を用いて、話題の感情価条件（ポジティブ・ニュートラル・ネガティブ）を被験者内要因とする解読実験を行った。話題条件からそれぞれ、研究1における会話満足度得点の上位2組・中位2組・下位2組ずつ抽出し、刺激（音声なし）として用い、全ての刺激に対して同一の観察者が評定するようにした。刺激呈示後、研究1の話者と同様の、「会話を上手く調節していた」、「協力的に会話が進んでいた」、「好意的に会話していた」、「相互に興味をもって会話していた」、「会話しにくそうだった」、「会話は緊張感を伴うものであった」の6つの質問項目への回答を観察者に求めた。

質問項目は、研究1の会話手続きで話者が回答した、会話満足度18項目を因子分析（主因子法・プロマックス回転）した結果、抽出された『会話調整因子』、『会話集中因子』、『ごちな

い会話因子』の3因子(因子間相関は.69-.73)から因子負荷量の高かった項目を順番に2つずつ選んだ6項目であった。具体的な項目の内容は、『会話調整因子』(説明率20.00%)からは「会話を上手く調節していた」「協力的に会話が進んでいた」の2項目、『会話集中因子』(説明率18.94%)からは「好意的に会話していた」「相互に興味をもって会話していた」の2項目、『ぎこちない会話因子』(説明率18.06%)からは「会話しにくそうだった」「会話は緊張感を伴うものであった」の2項目であった。研究2で因子分析を行い、質問項目を選出したのは、被験者内の解読実験の際に、評定を行う観察者の負担を減らすためである。観察者は6項目について会話全体の印象を8件法で評定した。6項目の α 係数が.81と比較的高い値であったことから、平均値を算出し、観察者が推測した「会話成功度」として以下の分析に用いた。「会話満足度」ではなく「会話成功度」としたのは、個々の話者の会話に対する評価について推測を求めた研究1と異なり、研究2では会話全体の印象について観察者に評定を求めたためである。

結果と考察

まず、研究1で話者自身の回答した18項目の中から、観察者が回答したものと対応する6項目を選出して平均し、話者それぞれの「会話満足度」得点を算出した。その後、ペアごとに2人の会話満足度を平均したのもをもって、各話者間の「会話成功度」とした。ポジティブ感情エピソード($M=6.06$, $SD=0.36$)とネガティブ感情エピソード($M=5.87$, $SD=1.19$)で、話者間の「会話成功度」に有意な差はなかった($t(22) = .44$, $n.s.$)。一方、観察者が推測した「会話成功度」はポジティブ感情エピソード($M=5.56$, $SD=0.55$)の方がネガティブ感情エピソード($M=4.92$, $SD=0.53$)よりも有意に高かった($t(19) = 5.77$, $p < .001$)ことから研究2の仮説は支持された。話者自身の判断に基づく「会話成功度」には話題間で差がないにも関わらず、観察者はポジティブ感情エピソード

よりもネガティブ感情エピソードの「会話成功度」を低く見積もっていたのである。これは、研究1で示された表出行動が活発なほどコミュニケーションがうまくいっていると判断する「表出性ハロー効果」によって、ポジティブ感情エピソードに比べてネガティブ感情エピソードでは表出が抑制されていること(e. g., 中村, 1991)から、表現の豊かさに欠け、それゆえ会話がうまくいっていないと判断されたためと考えられる。

研究 3

研究2において、ポジティブ感情エピソードよりもネガティブ感情エピソードでは、会話がうまくいっていないと観察者に判断されていた一方で、話者の認知レベルではそのような判断は行われていなかった。

研究1での探索的検討の結果、ネガティブ感情エピソードよりもポジティブ感情エピソードの方が話者の会話に対する評価と観察者の会話に対する評価の相関関係が強いことが示されたことと合わせて考えると、これは「表出性ハロー効果」によって、ポジティブ感情エピソードよりもネガティブ感情エピソードにおいて、話者の会話に対する評価と観察者の会話に対する評価のズレが大きくなるためであると考えられる。そこで研究3では、話者の会話に対する評価と観察者の会話に対する評価の差分の絶対値を用いて、認知のズレについて検討を行うことを目的とした。

また、研究2では、話者本人の会話満足度の平均値を「会話成功度」として用いたことで、会話全体の雰囲気について観察者に評定を求めた場合でも「表出性ハロー効果」が生起することを確認することができた。ただし、この指標は話者間の会話満足度に落差があった場合や、観察者によって話者間の会話満足度に落差があると推測された場合に、観察者が回答すべき選択肢がなかった可能性がある。そこで研究3では、研究1と同様に個々の話者について、会話に対する評価を観察者に推測するように求めた。

さらに研究2では、被験者内の要因配置で解読実験を行うために、観察者の負担を考慮して刺激数を制限していた。しかし、刺激数を制限したことで、刺激特性に偏りがあった可能性がある。そこで、研究3では、観察者に対してすべての会話場面を呈示した。

研究3の仮説は以下の通りである。

仮説：「表出性ハロー効果」によって、話者の会話に対する評価と観察者の会話に対する評価のズレはポジティブ感情エピソードの会話場面よりもネガティブ感情エピソードの会話場面のほうが大きくなるであろう。

方 法

実験参加者 学部生男性10名（平均年齢22.1歳， $SD=1.4$ ）、学部生女性12名（平均年齢21.6歳， $SD=1.9$ ）の計22名が観察者として参加した。

また、「表出性」について評定する、観察者と独立した印象評定者として、大学生男性5名（平均年齢21.4歳， $SD=0.9$ ）、女性7名（平均年齢20.7歳， $SD=0.8$ ）の計12名が参加した。実験参加者はすべて心理学のゼミ及び授業にて募集を行った。

手続き 観察者には、被験者内要因で解読実験を行った。女性の観察者にはニュートラル条件を除いた20組40名の女性同士の会話場面を、男性の観察者にはニュートラル条件を除いた20組40名の男性同士の会話場面を呈示した。研究1、2と同様に映像のみの刺激呈示後、質問項目⁴への回答を求めた。観察者は3項目について会話参加者自身の会話に対する評価を推測した。具体的な項目の内容は、「会話を上手く調節することができた」、「好意的に会話できた」、「会話がしにくいものであった」、であり8件法で評定を求めた。3項目の α 係数は.74と比較的高い値であったため、この3項目の平均値を算出し、観察者が推測した話者の「会話満足度」として

以下の分析に用いた。

また、「表出性」について印象評定を実施した。観察者と同様に、女性の評定者にはニュートラル条件を除いた20組40名の女性同士の会話場面を、男性の評定者にはニュートラル条件を除いた20組40名の男性同士の会話場面を呈示し、以下の質問項目への回答を求めた。より多面的に「表出性」についてとらえるために、評定者は、会話参加者の表出性について、「会話中の発言や行動が活発であった」、「会話中の感情状態や気分、考えていることが表情やしぐさにあらわれていた」、の2項目に8件法で回答した。

結果と考察

話題の感情価と表出性 印象評定者が回答した「表出性」に関する印象の2項目の合計値を「表出性」得点とした。ポジティブ感情エピソード（ $M=10.45$, $SD=2.03$ ）ではネガティブ感情エピソード（ $M=8.93$, $SD=1.13$ ）よりも「表出性」が有意に高く評定されていた（ $t(11)=2.52$, $p<.05$ ）。この結果は、中村（1991）や、Nakamura, Buck, & Kenny（1990）と一致している。

話題の感情価が対人コミュニケーションの認知に及ぼす影響 観察者が回答したのと同じ「好意的に会話できたかどうか」、「会話を上手く調節することができたかどうか」、「会話がしにくいものであったかどうか」の3項目の平均値による会話に対する評価について、会話参加者自身の判断（研究1にて実施）では、ポジティブ感情エピソード（ $M=6.00$, $SD=1.23$ ）とネガティブ感情エピソード（ $M=6.04$, $SD=1.37$ ）に有意差は認められなかった（ $t(78)=0.14$, $n.s.$ ；Figure 3 参照）。一方、観察者では、ネガティブ感情エピソード（ $M=5.01$, $SD=0.90$ ）よりポジティブ感情エピソード（ $M=5.40$, $SD=0.71$ ）を有意に高く評定していた（ $t(78)=2.18$, $p<.05$ ；

4 質問項目は、研究1の因子分析の結果、抽出された3因子からもっとも因子負荷量の高かった項目を1つずつ選んだ計3項目であった。研究3で用いたこの3項目は研究2で用いたものに含まれるものであったが、さらに項目を絞ったのは、刺激数の増加に対して実験参加者の負担を減らすためであった。

Figure 3 話者自身の会話満足度

Figure 4 参照)。この結果は研究 2 と同様のものであった。

さらに、研究 3 では、会話参加者と観察者の会話評価に対する認知のズレを示す指標として、会話参加者自身の会話に対する評価の平均値から、観察者が推測した話者の会話に対する評価の平均値の差分の絶対値を用いた。この指標の値が大きくなるほど、会話参加者と観察者の認知にズレがあることを示し、逆に値が小さくなるほど観察者による対人コミュニケーションの認知が正確であることを示している。この認知のズレについて、*t*検定を行った結果、ポジティブ感情エピソード ($M=1.05$, $SD=0.64$) よりもネガティブ感情エピソード ($M=1.39$, $SD=0.88$) の方が有意に大きいものであった ($t(78)=1.99$, $p<.05$; Figure 5 参照)。つまり、ポジティブ感情エピソードの会話場面よりもネガティブ感情エピソードの会話場面の方が、観察者による対人コミュニケーションは不正確に推測されていたのである。この結果は本研究の仮説を支持するものであった。

Figure 4 観察者の推測した会話満足度

Figure 5 話者自身と観察者の認知のズレ

総 合 考 察

本研究結果から、日本人大学生を対象にした場合においても「表出性ハロー効果」が確認された。話者の表出行動が活発なほど、コミュニケーションがうまくいっていると観察者が判断する「表出性ハロー効果」によって、「表出性」の高いポジティブ感情エピソードでは、会話参加者自身の会話に対する評価と観察者の会話に対する評価のズレが小さくなる一方で、「表出性」が低いネガティブ感情エピソードでは、「表出性」を手がかりにできないために、観察者が、話者自身の会話に対する評価を低く見積もり、話者自身の会話に対する評価と観察者の認知のズレが大きくなる。このことから、ネガティブ感情エピソードではポジティブ感情エピソードよりも観察者による対人コミュニケーションの認知が不正確に行われることが示唆された。ただし、本研究結果を一般化し、展開していくために、今後検討されるべきいくつかの課題が考えられる。

まず本研究では、視覚的情報を手がかりにした対人コミュニケーションの認知に焦点を当てて研究を行ったが、音声情報も重要な情報源であると考えられるため、今後は考慮に加えて検討していかなければならない。

また本研究では、観察者は話題の感情価について知らないままに話者の会話に対する評価を推測していた。しかしながら、Nakamura, Buck, & Kenny (1990) が指摘するように、われわれは通常、他者の内的状態を推測する際に表出行動

と文脈情報を合わせて手がかりに用いている。あらかじめ観察者に文脈情報である話題の感情価を知らせておいた場合でも、「表出性ハロー効果」がみられるのかについて検討していかねばならない。

最後に、対人コミュニケーション認知の精度の向上に向けて述べる。本研究結果から、「表出性ハロー効果」によって、「表出性」を手がかりにして対人コミュニケーションの認知を行えば、ネガティブ感情エピソードの会話では相対的に不正確な認知を行ってしまう可能性が示唆された。そこで、話題の感情価に左右されずに対人コミュニケーションで表出される手がかりについて検討し、その手がかりに注目することで精度の向上を追求していくことが今後の課題として挙げられる。

対人コミュニケーション認知の結果を観察者にフィードバックすることで、その精度は向上するという報告もある (Gillis, Bernieri, & Wooten, 1995)。さらに、Bernieri, & Gillis (1995) では、外向性や神経症傾向のようなパーソナリティと対人コミュニケーション認知の精度との関連を調べたが、有意な関連は認められなかった。これらの先行研究から、対人コミュニケーションの認知を訓練によって向上するような、一種の社会的スキルとして位置づけられよう。一般的に、社会的スキルは対人関係を円滑に進めるための適応能力として定義される。わが国の先駆的な研究としては、堀毛 (1987, 1994) や菊池 (1988) が挙げられるが、近年社会的な適応を促すためのトレーニング・プログラムの開発、実践研究が活発に行われている (相川, 2000; 津村, 1994; 大坊, 2003)。今後は、対人コミュニケーション認知が社会的スキルの1つであるという可能性を検討しながら、向上を目指すためのプログラム開発や、その基礎となる知見の探求が求められる。

引用文献

相川充 2000 人づきあいの技術—社会的スキルの心理学— サイエンス社

- Bernieri, J. F., & Gillis, J. S. 1995 Personality correlates of accuracy in a social perception task. *Perceptual and Motor Skills*, **81**, 168-170.
- Bernieri, J. F., Gillis, J. S., Davis, J. M., & Grahe, J. E. 1996 Dyad rapport and the accuracy of its judgment across situations: A lens model analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, **71**, 110-129.
- 大坊郁夫 2003 社会的スキル・トレーニングの方法序説—適応的な対人関係の構築— 対人社会心理学研究, **3**, 1-8.
- Duval, S., & Wicklund, R. A. 1972 *A theory of objective self awareness*. Academic Press, New York.
- Gillis, J. S., Bernieri, F. J., & Wooten, E. 1995 The effects of stimulus medium and feedback on the judgment of rapport. *Organizational Behavior and Human Decision Process*, **63**, 33-45.
- 堀毛一也 1987 自己モニタリングの概念および尺度に関する検討 東北福祉大学紀要, **11**, 185-199.
- 堀毛一也 1994 ひとあたりの良さ尺度 菊池章夫・堀毛一也編 社会的スキルの心理学 川島書店
- Jones, E. E., & Nisbett, R. E. 1972 The actor and the observer: Divergent perceptions of the causes of behavior. In E. E. Jones, D. E. Kanouse, H. H. Kelly, R. E. Nisbett, S. Valins, & B. Weiner (Eds.), *Attribution: Perceiving the causes of behavior*. General Learning Press, 79-94.
- 菊池章夫 1988 思いやりを科学する 川島書店
- Matsumoto, D., & Ekman, P. 1989 American-Japanese cultural differences in intensity ratings of facial expressions of emotion. *Motivation and Emotion*, **13**, 143-157.
- Monahan, J. L. 1995 Information processing differences of conversational participants and observers: The effects of self-presentation concerns and cognitive load. *Communication Monographs*, **62**, 265-281.
- 中村真 1991 情動コミュニケーションにおける表

- 示・解読規則 大阪大学人間科学部紀要, **17**, 115-146.
- Nakamura, M., Buck, R., & Kenny, D. A. 1990 Relative contributions of expressive behavior and contextual information to the judgment of emotional state of another. *Journal of Personality and Social Psychology*, **59**, 1032-1039.
- Scherer, K. R., & Ekman, P. 1984 *Approaches to emotions*. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum.
- Scherer, K. R., Wallbot, H. G., Matsumoto, D., & Kudoh, T. 1989 Emotional experience in cultural context: A comparison between Europe, Japan, and the United States. In K. R. Scherer (Ed.), *Facets of emotion*. New Jersey: Laurence Erlbaum.
- Takai, J. & Ota, H. 1994 Assessing Japanese interpersonal communication competence. *Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, **33**, 224-236.
- 高井次郎 1996 日本人の対人関係 長田雅喜(編) 対人関係の社会心理学 福村出版
- 津村俊充 1994 社会的スキルの訓練 菊池章夫・堀毛一也編 社会的スキルの心理学 川島書店